

駆虫にもご用心

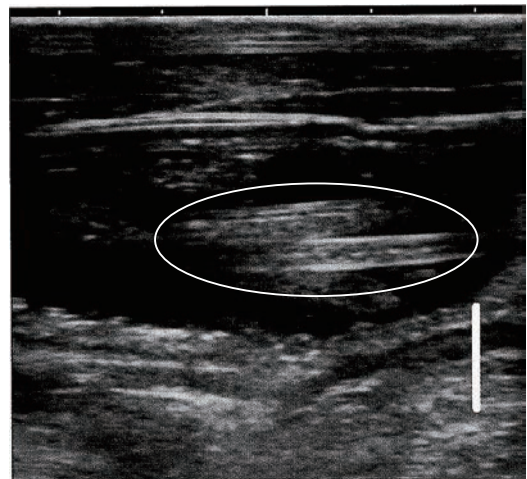
静内診療所 井上 哲

繁殖シーズンも終わりを迎え一息つかれている頃かもしれません。我々獣医師も溜まっていた執筆活動に精を出す時期がやってきました。今回は、前田獣医師が寄生虫対策について掲載されましたのでその流れでこれからの時期、注意が必要となる子馬の回虫症についてお話しさせていただきます。

昔々（20～30年前）、子馬への駆虫は生後1ヶ月半から2ヶ月ぐらいにイベルメクチン（通称E.ペースト）を投与し、その後1から1.5ヶ月間隔でパモ酸ピランテル（S.シロップ）と交互に投与する駆虫プログラムを推奨していました。このため虫下しを一度もかけない牧場以外で回虫による腸閉塞に遭遇することはなかったと記憶しています。しかし、イベルメクチンに対して耐性を獲得した回虫が出現すると、子馬の体内で数、大きさともに勢いを増していきました。そしてこのタイミングで、寄生虫に対して迅速に強直性麻痺（虫体を硬直化）を引き起こし死滅させるパモ酸ピランテルを投与することによる駆虫後の腸閉塞が散見されるようになったように思われます。厄介なことに回虫による腸閉塞は、回復手術後の予後があまり良くない印象を持っています。ある研究によると、手術適応となった馬37頭中31頭が退院はできたが1年後の生存は11頭のみだったという報告からも手術により詰まった回虫を取り除けば良いというものでは決してありません。2年ほど前には、パモ酸ピランテルも発売が中止され、回虫を標的とした駆虫薬はフルベンダゾールへとシフトしています。この薬は

ゆっくりと代謝を阻害し、寄生虫は最終的に餓死した（硬直しない）後、体外へ排出されることから他の駆虫薬と比較し腸閉塞のリスクは低いと考えられています。

したがって回虫がターゲットとなる子馬への最初の駆虫は、生後2.5～3ヶ月ごろにフルベンダゾールを投与することが推奨されます。万が一、イベルメクチンをやったからと安心されているなら、子馬の消化管内で成長した回虫が原因による疝痛を引き起こす事になるでしょう。そして前述したように命に関わるケースがあることも忘れないで下さい。



小腸に回虫が寄生している子馬の超音波画像
『馬の寄生虫対策ハンドブック』より引用

最近、当歳馬全頭に対してフルベンダゾールによる駆虫をされた牧場の方から聞いた話では、運動器疾患により2ヶ月間舎飼していた子馬を除く全ての個体から回虫がわんざと出てきたそうです。改めて回虫が放牧地を介した“子馬から子馬”への感染であることが認識できる事例でした。

回虫以外の駆虫についても重要です。虫卵検査等、担当医と相談の上実施されると良いでしょう。